



PRESS RELEASE

岡山大学記者クラブ

文部科学記者会

科学記者会

御中

令和 6 年 8 月 20 日

岡 山 大 学

新型コロナ後遺症の症状に見られる立ちくらみ症状の特徴を調査

◆発表のポイント

- ・ 新型コロナ後遺症では、立ちくらみやめまいなどの自律神経に関連する症状が見られます。
- ・ 起立試験を実施した新型コロナ後遺症患者のうち約 4 割が陽性で、脈拍の増加や拡張期血圧の上昇を認めました。
- ・ 起立試験が陽性の後遺症患者の約半数は 20 歳未満の若者で、内分泌系に変化が見られました。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科の加藤篤之大学院生と、岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）総合内科学の大塚文男教授らのグループは、岡山大学病院のコロナ後遺症外来（コロナ・アフターケア外来）を受診した患者に見られる「起立性調節障害」の有無とその特徴について研究を行いました。

起立性調節障害は、自律神経の異常によって血圧や心拍数の調節がうまく行われず、立ちくらみやめまい、動悸、失神などの症状が生じます。新型コロナ後遺症の患者さんも、このような起立性調節障害の症状が見られることがあります。その特徴は十分に知られていません。今回の研究では、コロナ後遺症で受診した患者さんのうち、立ちくらみ症状を訴えた患者さんに対して起立試験^{※1}を行いました。その結果 38%の患者で陽性となり、そのうち約半数（48.5%）が 20 歳未満の若年者でした。

起立試験陽性の患者さんの症状には、吐き気や動悸が多く、起立したときの頻脈と、起立直後の拡張期血圧の上昇が特徴的でした。さらに、若年の患者さんでは、脳下垂体から分泌される血中の成長ホルモンが低いことも分かりました。この研究結果は、2024 年 7 月 24 日、国際学術雑誌「*Scientific Reports*」に掲載されました。

◆研究者からのひとこと

コロナ・アフターケア外来は、総合内科・総合診療科の医師がチームで担当しています。患者さんの症状にあわせて一人一人に向き合った診療を心がけることで、起立性調節障害へのフォーカスができたと考えております。今後も、苦しんでいる患者さんに還元できる研究を行ってまいります！



加藤篤之 大学院生

新型コロナウイルス感染症は、5 類に移行して 1 年以上を経ても、増減を繰り返しながら続いています。ウイルス感染時の発熱や咽頭痛など急性期の症状だけでなく、後遺症では倦怠感をはじめとさまざまな症状が認められます。コロナ後遺症の原因究明と、その治療方針に関する研究を行い、発信していきたいと考えています。



大塚文男 教授



PRESS RELEASE

■発表内容

<現状>

新型コロナウイルスは、感染からの回復後も倦怠感などの症状が長引くことがあり、新型コロナウイルス罹患後症状（コロナ後遺症）と言われています。コロナ後遺症の症状は、全身倦怠感だけでなく、頭痛、睡眠障害、味覚・嗅覚障害など多岐にわたります。岡山大学病院のコロナ・アフターケア外来では、2021年2月15日の開設からこれまで1,000人を超える新型コロナ後遺症患者を診療してきました。

<研究成果の内容>

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科の加藤篤之大学院生と岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）総合内科学の大塚文男教授らのグループは、2021年2月から2023年4月までの間に、当院のコロナ・アフターケア外来を受診したコロナ後遺症患者691人のうち、起立性調節障害を疑って起立試験を行った86人について、試験結果と後遺症の症状や内分泌学的な特徴について検討しました（10歳未満は除外）。その結果、33人（38%）が起立試験陽性で、そのうち約半数である16人（48.5%）が20歳未満の若年者だということが分かりました。起立試験陽性の後遺症患者には、吐き気と動悸の症状が多く、起立時の頻脈とともに、起立直後の拡張期血圧の上昇が認められました。また、起立試験陽性の若年の後遺症患者では、下垂体ホルモンである血中の成長ホルモンが低いことも分かりました。

起立性調節障害は、身体的な原因がある一方で、心理社会的なストレスも発症に関与しているとされています。症状が重い場合は、症状の改善のために薬物治療と並行して周囲の環境を整えることも大切です。自律神経の働きが不十分であることが原因とされ、多くは学童期から思春期にかけて発症しますが、通常は成長とともに改善します。ストレスやホルモンバランスの乱れ、水分や栄養不足も発症に関係するため、成人で発症する場合があります。

今回の研究では、若年者のコロナ後遺症において、立ちくらみ症状（ふわふわする、起立時のふらつき、しゃがみ込みなど）がコロナ後遺症に関連する場合があること、起立試験や内分泌検査などが診断に有用であることが明らかとなりました。

結果のまとめ

- 立ちくらみ症状を訴えるコロナ後遺症患者では、起立試験を行うと38%が陽性であった。
- 起立試験陽性のコロナ後遺症患者では、吐き気・頻脈などの症状を多く認めた。
- 起立試験陽性の後遺症患者の若年例では、成長ホルモン分泌が低下していた。

<社会的な意義>

コロナ後遺症の症状は多岐にわたり、訴えの多くは自覚症状であることから周囲から認識されにくいと言えます。立ちくらみやめまいなどの症状も、若年者のコロナ後遺症症状として注意すべき症候であり、単なる疲れや気分の問題と軽視するのではなく、症状に悩んでいる場合は薬物療法など適正な治療や症状の改善を図ることが大切です。



PRESS RELEASE

■論文情報

論文名：Clinical and endocrine features of orthostatic intolerance detected in patients with long COVID.

掲載紙：Scientific Reports

著者：Atsushi Kato, Kazuki Tokumasu, Koichiro Yamamoto, Yuki Otsuka, Yasuhiro Nakano, Hiroyuki Honda, Naruhiko Sunada, Yasue Sakurada, Yui Matsuda, Toru Hasegawa, Ryosuke Takase, Keigo Ueda & Fumio Otsuka

DOI：10.1038/s41598-024-67815-y

URL：https://doi.org/10.1038/s41598-024-67815-y

■補足・用語解説

(1) 起立試験

ベッドに寝て安静時の脈拍と血圧を記録したあと、静かに起立した姿勢を保ち、症状の変化と脈拍・血圧の変化を調べる検査で、めまいや立ちくらみ、起立で生じる気分不良や倦怠感などの症状の原因となる「起立性調節障害」の判定に用いられます。起立によって症状が悪化し、脈拍が30以上増加したり、血圧が25以上低下した場合に陽性と判定します。

<お問い合わせ>

岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）総合内科学
教授 大塚 文男

（電話番号）086-235-7342 （FAX）086-235-7345



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY



岡山大学は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。